

序

よりよい内科病棟診療とはなんでしょうか？

もちろん、主疾患に関する最新のエビデンスと今までの経験を駆使して、最善の医療を提供することが内科医としての矜持であることは言うまでもありません。しかし、昨今の高齢化社会において多疾患の共存だけでなく、社会的・精神的な問題も加わり、複雑な事例は徐々に増加しています。予期しない発熱、誤嚥性肺炎、肝機能障害、糖尿病への対応、抗血栓薬の中止の判断など、主治医は主疾患以外の問題にも日々直面しています。効率的な仕事スキル、手技、エコーなど基礎的な技術にも習熟する必要があるだけではなく、栄養やリハビリへの深い理解も必須となっています。さらに、多職種連携のスキルや転院調整・退院支援への理解、主治医意見書の書き方など生物学的问题以外の問題も、この高齢化社会では避けては通れないと言えます。病院で勤務するすべての内科医は日々主治医としてこれらの問題に対して、立ち向かう必要があります。

こういった背景を考えると、内科医は幅広い生物学的な問題に関する知識や経験が必要であるのは言うまでもなく、社会・精神的な問題も包括的に扱う姿勢が求められていると言えます。これらは通常の教科書ではあまり取り上げられてこなかったかもしれません。

本特集はそれらの背景を踏まえ、少しでも日々の内科病棟診療の質が上がるようという思いを込めて企画しました。2014年に発行されたレジデントノート増刊「入院患者管理パーフェクト」の続編として、石丸裕康先生が特集の枠組み作り、森川が主に執筆者の選定をさせていただきました。執筆者はいずれも、日々臨床の現場で汗を流している、新進気鋭の若手ジェネラリストであり、今後の日本の将来を担う人材です。若手の内科の先生方が病棟診療で困るポイントを、痒いところに手が届くようにわかりやすく、かつエビデンスと経験に基づき記載しています。

本特集が内科病棟診療の臨床の現場で、若手の先生方の役に立てばこれ以上の喜びはありません。

最後に、このような素晴らしい企画に誘ってくださった石丸先生、羊土社の皆様、そして無理なお願いを聞いてくださった執筆者の皆様へ、心より御礼申し上げます。

2017年10月

秋が深くなった東京深川で

JCHO 東京城東病院総合内科
森川 暢